
 学 会 記 事

 第 8 回新潟外科系領域
 バイオメディカル研究会

日 時 平成 9 年 6 月 27 日 (金)

18:00~20:00

 会 場 新潟グランドホテル 3 階
 悠久の間

I. 一 般 演 題

 1) ABO 血液型不適合間生体腎移植における
 血漿交換の有用性

中川	由紀	・斎藤	和英
谷川	俊貴	・今井	智之
筒井	寿基	・片桐	明善
木村	元彦	・水澤	隆樹
車田	茂徳	・杉村	淳
富田	善彦	・武田	正之
高橋	公太		
尊田	和徳		

(新潟大学泌尿器科)
(白石病院)

1996 年 4 月から 1997 年 1 月までにタクロリムス、アザチオプリン、ステロイドの 3 剤に ALG、移植腎局所照射を加えたプロトコルで、7 例の ABO 血液型不適合間生体腎移植を行った。脾摘は全例に併用した。レシピエントは全員男性で、平均 32.3 歳 (22~52 歳)、平均透析歴は 5 年 (1~11 年)、原因疾患は IgA 腎症 3 例、アロポート症候群 2 例、巣状糸球体硬化症 1 例、慢性腎炎 1 例であった。ドナーは父 2 例、母 2 例、妻 1 例で、平均年齢は 55.7 (46~63 歳) であった。組織適合性については HLA ミスマッチ数 2 が 2 例、3 が 4 例、4 が 1 例で血液型に関しては A 不適合が 4 例、B 不適合が 3 例であった。移植後拒絶反応は、なしが 2 例、2 回が 2 例、3 回が 2 例、5 回が 1 例に認められ、転帰は 1 例を除いては全員生着している。また術後合併症は全例に CMV-Ag が陽性になっているほか、2 例に食道カンジダ症を認め、消化管潰瘍が 6 例に、耐糖能障害が 4 例に認められた。術前の抗赤血球抗体除去は全例二重膜濾過血漿交換法 (DFPP) を行い、術前抗赤血球抗体は 4 倍以下にした。術後抗体価の上昇を伴う拒絶反応をきたした症例は 2 例を認め、これらに対し DFPP と全血漿交換それぞれ 1 回ずつ施行した。その後抗体価上昇は認めず腎機能良好で生着している。病理組織学的にも糸

球体や peritubular capillary への多形核白血球浸潤、血管内皮細胞障害、血栓形成など液性免疫が関与すると思われる CASE では血漿交換療法の積極的な適応と考える。

2) 肺外科領域における生体接着剤

吉谷	克雄	・土田	正則
大和	靖	・林	純一
江口	昭治		

(新潟大学第二外科)

肺外科領域においても、近年、高齢者の肺手術例の増加とともに高度の気腫性変化や慢性肺疾患を伴うことが多く、気腫性肺の縫合部の針穴や剝離面などの肺胸膜欠損部からの air leakage に難渋する症例や、自然気胸の治療などに生体接着剤を用いることが多い。

肺外科領域で多く使用されるフィブリン糊は、生理的な血液凝固機序と組織治癒機序を応用した接着剤である。フィブリノーゲン末およびⅩ因子をアプロチニン溶液に溶解した A 液と、トロンビン末を塩化カルシウム液にて溶解した B 液をそれぞれ注射器に吸引し、同量の両液を局所で混ぜてフィブリン塊を生成する。従来の重層法 (A 液をまず塗布し、直ちに B 液を塗布する方法) や混合法 (A 液と B 液を同時にあるいは混ぜ合わせた後に目的とした部位に散布する方法) のほかに、その接着強度の低さを補うべく圧縮空気を利用して A・B 両液を霧状に噴霧することにより微細な混合による sealing 効果の増強と広範囲な均等な塗布を可能にしたスプレー法、肺胞面での接着効果を得るため初めにより粘度の低い B 液を擦り込むことにより肺実質に染み込ませ、その後 A 液を薄く塗り、これを塗り広げ圧迫することで、薄いフィブリンの層を肺の表面に密着して形成させる擦り込み法、さらには吸収性メッシュとの併用などの工夫がなされている。また、近年、肺外科領域におけるセラチン糊の使用について、接着力が強いなど、その有用性が報告されている。

3) 同種筋膜を用いた関節形成術

古賀	良生	(新潟こばり病院)
		整形外科
大森	豪	・菊池
		達哉 (新潟大学整形外科)

人工関節の改良・普及によりその置換術が関節形成術と同義語のように用いられるようになった。しかし、耐久性や感染の危険など非解決の問題も多い、新潟大学整